

黙示録14章1-5節 「贖いの初穂 14400 人」

1A シオン山に立つ子羊 1

1B 勝利する子羊

2B シオンの希望

3B 額に記される御名

2A 新しい歌 2-3

1B 天からの音 2

2B 御座の前での歌 3

3A 贖い出された者たち 4-5

1B 童貞 4

2B 子羊について行く者 4

3B 神と子羊に献げる初穂 4

4B 偽りのない口 5

本文

黙示録 14 章を見ていきましょう、今晚は、初めの 5 節を見ます。(本文を読む)

私たちは 13 章において、獣の国について読みました。ダニエルに啓示された、七十週の期間の最後の週の半ば、獣が致命的な傷を負ったけれども、それが直ります。彼は底知れぬ所から出て来て、悪魔からその力と権威と位が与えられました。そして、偽預言者も現れます。彼は反キリストの持っている力を人の前で見せて、獣を拝ませます。神の宮の至聖所で反キリストは自分が神だと言い、そしてその偽預言者が彼を神として拝ませるのです。なんと獣の像を造って、その像に物を言わせたりします。そして獣の像を拝まない者を殺すのです。さらに、右の手か額に、獣の名の数字の刻印を受けさせて、受ける者は売り買いができます。

その数字は、六百六十六でした。六は人間の数字であり、神の数字、七から一つ少ないです。完全ではないもの、ほとんど完全であるけれども、完全ではないものを拝む、これが欺きの始まりです。神のかたちに造られたのに、神のようになれるというそそのかしで、エバは善悪の知識の木から実を取って食べました。神そしてキリストは、全き義を与え、全き平安を与え、完き愛を与え、私たちを完全に救われます。しかし、完全を与えられる神を受け入れたくないとするとき、人を称賛します。そこに反キリストの欺きを信じるようにされていくのです。

このように 13 章まで読めば、まるで悪魔が勝利し、反キリストが勝利したかのように見えます。しかし、神は余裕をもって勝利しておられます。反逆している者たちを見て、「詩 2:4 天の御座に

着いておられる方は笑い主はその者どもを嘲られる。」のです。14章は、神とキリストが勝利しておられる姿の幻を見せます。そして15章、16章で、神が地上に怒りを注がれる幻を見せます。

1A シオン山に立つ子羊 1

¹ また私は見た。すると見よ、子羊がシオンの山の上に立っていた。また、子羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には子羊の名と、子羊の父の名が記されていた。

1B 勝利する子羊

黙示録で新たな場面、新たな幻に入る時の、「また私は見た。すると見よ」という注意喚起から始まります。そして、「子羊がシオンの山の上に立っていた」とあります。黙示録で、私たちの主が「小羊」と呼ばれています。これはもちろん、私たちを愛し、私たちのために血を流して罪から解放してくださったことを示す言葉です。5章における、屠られたけれども、よみがえられたキリストの姿を思い出してください。「5:6 また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているのを見た。それは七つの角と七つの目を持っていた。その目は、全地に遣わされた神の七つの御霊であった。」屠られたけれども、よみがえられたことを、「子羊が立っている」とヨハネは言い表しています。死んで、葬られているのではない。ほら、立っている！ということです。栄光の姿で現れた主は、「1:15-16 わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。」と言われていましたね。

このよみがえられた方が、天において父なる神の右の座に着いておられて、全能の力をおびて、天から地に戻って来られます。それが、「シオンの山の上に立っていた」とあるのですが、これは既に主イエス・キリストが、再臨されてエルサレムの山に立たれたことを示す言葉であります。時は一挙に、地上に再臨して神の国を始めようとしているイエス様の姿を示しているのです。11章で、第七のラッパが吹き鳴らされた時に、天に大きな声が起こりましたね。「11:15 この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」主は、獣の国があろうとも、もう先じて、この世の王国はキリストのものとなったことを示してくださっているのです。この14章も同じです。私たちの信仰は、悪魔が狼狽する世を見ると同時に、その悪魔に打ち勝ったキリストご自身の世界をそれ以上に見上げる必要があります。

2B シオンの希望

シオンの山とは、エルサレムの町を構成するいくつかの山の一つです。イスラエルの地図を見ますと、その国の中心部は山々が南北に連なっており、エルサレムもいくつかの山が連なっています。アブラハムがイサクを献げたモリヤの山があり、その南にダビデがエブス人から奪い取ったシオンの要害があります。そこがシオンの山です。けれども、シオンはエルサレム全体をしばしば指します。イスラエルの約束の地自体を、シオンと言う時もあります。シオンを自分の町としたダビデに対して、主なる神が、あなたの世継ぎの子からキリストが出て、永遠の国を治めると約束され

ました。ですから、シオンは、そこに神がおられ、御子キリストがそこから治められる希望を表しています。ユダヤ人の人々がどうして、先祖が住んでいたその地に帰還したいのか、シオニズムと呼ばれますが、シオンに対する思慕を募られているのか、わかるでしょう。そこは、神の住まわれる、そこから神が王として支配される場所として、希望があるからです。

使徒の働き 1 章において、イエス様はオリーブ山から天に昇られました。弟子たちが天を見上げてみると、「1:11 ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」と言いましたね。イエス様は再び戻られる時、オリーブ山の上に立たれます。そして地殻変動が起こります。「14:4 その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。」そして主は、エルサレムを最も高い山として、そこにイエス様が王として君臨されます。詩篇二篇 6 節には、「わたしがわたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山シオンに。」とあります。詩篇 48:2 には、「高嶺の麗しさは全地の喜び。北の端なるシオンの山は大王の都。」とあります。そして、イザヤ書 2 章には、このシオンから主が教えを垂れるので、世界の国々が集まって来ることを預言しています。「2:3 多くの民族が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家の上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから【主】のことばが出るからだ。」主ご自身によって教えを聞ける、シオンの山に集える日が来ます。

3B 額に記される御名

そして、この子羊と共にいるのが、十四万四千人の者たちです。小羊と共に、とありますから、親しい関係があり、同じように共に統べ治める関係を表していますね。

彼らは、7 章に出て来た 14 万 4 千人のイスラエル十二部族の子孫たちです。彼らの特徴は、「神の印が押されている」ことでした。彼らに印を押すまでは、天使たちが木や海にどんな害も加えてはいけないと命じられていました。「7:3-4 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけません。」4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。」患難時代の始めの時期、第七の封印が解かれる前に、神がご自分の所有として、これらイスラエル人たちに印を押していたのです。患難時代、最後の第七十週が始まった時に、神が彼らにご自身名を記しておられたのです。彼らが主の所有のものであることを示しています。そしてここ 14 章には、「その額には子羊の名と、子羊の父の名が記されていた」とあり、イエス様が父なる神の子であられて、彼らはその父と子の交わりの中に入れられていることが強調されています。ヨハネが第一の手紙で、「1:3 私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」とあるとおりです。

この幻は確実に、13章における獣の国における獣の名前の刻印を意識したものです。反キリストと偽預言者、そしてその背後にいる悪魔は、神の国の物真似をして、自分たちに属する者たちを作るべく、六百六十六の数字を示す名前を押させたのですが、主ご自身は14万4千人に神とご自身の印を押しておられ、彼らを勝利者として認定しておられたのです。

ですから、大患難も通り過ぎ、最後まで害を受けず、御国の到来の時に救われている姿を見せています。すでに9章で、いなごのような悪霊どもが害を与えていましたが、その時に害を受けていなかったことが書かれていました(4節)。そして、主イエスがシオンに戻って来られるまで、このように害を受けずに守られているということなのです。聖書には、水の中、火の中にあっても、それでも救われる人々の姿を証しています。「イザ 43:2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは、あなたとともにいる。川を渡る時も、あなたは押し流されず、火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」水の中を通ったノアの家族、八人は、神の裁きであった洪水を通して救われました。ダニエルの友人三人は、ネブカデネザルによる燃える火の炉に投げ込まれても、それでも害を受けることなく救われました。

2A 新しい歌 2-3

そして次に、14万4千人のイスラエル人が、どのような親しい関係を神と持っているかが、新しい歌によって現れている部分を見ます。

1B 天からの音 2

² また、私は天からの声を聞いた。それは大水のとどろきのようであり、激しい雷鳴のようでもあった。しかも、私が聞いたその声は、豎琴を弾く人たちが豎琴に合わせて歌う声のようであった。

「天からの声」です。今、子羊がシオンの山に立っておられるのですが、天から降りて来られた時、天自体も地に近づいています。それは、ちょうど、シナイ山に主が降りてこられた時のようです。天にあるものが、主が降りて来られると、雷鳴や雷と共に降りてこられたのと同じです。イエス様がパトモス島にいるヨハネに現れた時に、「その声は大水のとどろきのようであった。」とありました(1:15)。エゼキエル1章24節には、主の御座のそばにいるケルビムが、そのような音を立てているのを見ます(1:24)。

そして、声が聞こえたのですが、それが「豎琴を弾く人たちが豎琴に合わせて歌う声のよう」とあります。豎琴と言えば、ダビデが少年の時から弾いていた楽器です。詩篇には、豎琴をもって主をほめたたえることが勧められています。「詩篇 144:9 神よあなたに私は新しい歌を歌い十弦の琴に合わせてほめ歌を歌います。」そして、神殿での礼拝に、立琴をも含めた主への賛美を導入させています。「1歴代 15:16 ダビデはレビ人の長たちに命じて、彼らの同族の者たちを歌い手として任命し、琴、豎琴、シンバルなどの楽器を手に、喜びの声をあげるようにさせた。」なぜ、そんな

にダビデが豎琴にこだわったのか？それは天の音色だからです。天において、立琴のような音がするからです。ダビデは、御霊によってそのことを知っていたのでしょう。

2B 御座の前での歌 3

³ 彼らは御座の前と、四つの生き物および長老たちの前で、新しい歌を歌った。しかし、地上から贖われた十四万四千人のほかは、この歌を学ぶことができなかった。

天の神の御座にいるのが、これら四つの生き物と長老たちでした。つまり、まさに今、天が降りて来て、彼らのところに御座が置かれているのです。そして、「新しい歌」ですが、これは主との親しい関係、新たにされる関係を表していますね。「詩 33:1-3 正しい者たち【主】を喜び歌え。賛美は直ぐな人たちにふさわしい。2 豎琴に合わせて【主】に感謝せよ。十弦の琴に合わせてほめ歌を歌え。3 新しい歌を主に歌え。喜びの叫びとともに巧みに弦をかき鳴らせ。」豎琴によって、神を賛美する者たちが喜び歌っています。昔、ヒッピーたちがイエス様を信じた時、自分たちから出て来る思い、歌を、そのまま自分の持っているギターで歌にしていきました。新しい歌です。

しかも、「地上から贖われた十四万四千人のほかは、この歌を学ぶことができなかった」とあります。彼らが主と持っているような関係でなければ、歌うことができないような特別な歌であったようです。今、有名になっている歌、例えばアメージング・グレイスは、クリスチャンではない人でも歌われているほどですが、主の前では本当に神の恵みにあずかっている人でなければ、意味がないでしょう。

3A 贖い出された者たち 4-5

誰にも学ぶことが出来なかったという親しさですが、それが、主に対する純潔という関係の中で保たれていたことを次に教えています。

1B 童貞 4

⁴ この人たちは、女に触れて汚れたことがない者たちで、童貞である。彼らは、子羊が行く所、どこにでもついて行く。彼らは、神と子羊に献げられる初穂として、人々の中から贖い出されたのである。

ここの「童貞」は、14万4千人の人たちが神に対して貞潔を守っていることを表しています。シナイの山で、聖なる神の前に出る時に、三日間、女に触れてはいけないとイスラエル人は命じられていました。妻を知ることは、もちろん良いことなのですが、主の前に出るという特別の時に、触れないように命じられました。今、彼らは天に対する新しい歌を歌っていますから、そういった純潔を保っていたのでしょう。

そして、この彼らは苦難の時を経ていた。エレミヤの時代、エルサレム、すなわちシオンは危機的な状況でした。バビロンによって滅ぼされそうになっていました。エレミヤは祭司であり、妻を持つ、子を持つことは奨励されていましたが、このような危機的な状況で彼に童貞を神が命じられていました。「16:2-4 「あなたはこの場所で、妻をめとるな。息子や娘も持つな。」3 まことに【主】は、この場所で生まれる息子や娘について、また、この地で彼らを産む母親たちや、彼らをもうける父親たちについて、こう言われる。4 「彼らはひどい病気で死ぬ。彼らは悼み悲しまれることなく、葬られることもなく、地の面の肥やしとなる。また、剣と飢饉で滅ぼされ、屍は空の鳥や地の獣の餌食となる。」エゼキエルはめとっていましたが、なんと途中で死んでしまいます(24:18)。それは、同じようにエルサレムで娘や息子たちが死んでしまうからだを教えています。同じようにして、大患難の時は、「身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。」とイエス様は言われています(マタイ 24:19)。それは、反キリストによる迫害の手から免れないからです。ですから、大患難を通る 14 万 4 千人は、そのような危機的な状況の中で妻を持たなかったということが言えます。

それだけではありません。シオンが建て直されるにあたって、彼らはその象徴的存在です。純潔についての比喻は、例えば、イザヤ書 37 章 22 節に、「処女である娘シオン」とイスラエルが表現されています。シオンそのものが、他の偶像礼拝などに汚されていないことを示しています。しかし患難時代、11 章で、エルサレムがソドムとかエジプトとか呼ばれたことを思い出してください(8 節)。けれども、彼らは貞潔を守っていたのです。13 章にて、全世界のすべての住民に、獣の刻印を押されるという強制が行なわれたのを見ました。非常に汚れた行為ですが、14 万 4 千人はこれらの汚れに汚されなかったのです。

そして、主が戻って来られます。シオンが建て直されます。まず、シオン、エルサレムは清め洗いを受けて、汚れが取り除かれます。「ゼカ 13:1-2 その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。2 その日——万軍の【主】のことは——わたしはもろもろの偶像の名を、この地から絶ち滅ぼす。それらの名はもう覚えられない。わたしはまた、その預言者たちと汚れの霊をこの国から除く。」こうして、シオンは建て直されます。「エレ 31:4 おとめイスラエルよ。再びわたしはあなたを建て直し、あなたは建て直される。再びあなたはタンバリンで身を飾り、喜び踊る者たちの輪に入る。」

14 万 4 千人は、このように、童貞だただけでなく、霊的にも主に対して貞潔を保って、主が戻られるのを迎えしていたのです。そして、シオンそのものが汚れから清められます。

2B 子羊について行く者 4

そして、「子羊が行く所、どこにでもついて行く。」と言っていますね。これは、彼らが主に対して忠実であることを示しています。イエス様が弟子たちに言われていたことを実践しています。「ヨハ 12:26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わ

たしに仕える者もいることとなります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」
どんな時にも主と共にいる、ということが主のしもべにふさわしいです。それが、自分に苦しみが伴う時でもそうですね。

3B 神と子羊に献げる初穂 4

そして、「神と子羊に献げられる初穂」とあります。「初穂」は、レビ記23章に出てくる言葉です。「初穂の祭り」というものが、過越の祭りの三日目に行なわれます。大麦の収穫があるとき、まず初めに主におささげするというのが、その主旨です。それから 50 日後に五旬節がありますが、これは小麦の初穂を主にささげる祭りです。ですから初穂は、これからの収穫を予告するものであり、贖われた者の初穂ということは、これから 14 万 4 千人のほかにも、数多くのイスラエル人たちが贖われるという意味です。

神は、イスラエルを見捨てられていないというのは、旧約聖書に数多く書かれている預言であり、そしてパウロが、霊的真理としてはっきりと宣言している事実です。イスラエルが見捨てられたことになるのか？という問いに、「絶対にそんなことはありません」とローマ 11 章 1 節で答えています。その証拠に、自分も含めてイエス様を信じているユダヤ人たちがいます。彼らは、旧約の預言でもよく言われていた、「残された者」「残りの民」です。そしてパウロは、異邦人の完成が終わったらイスラエルがみな救われる、と預言しています。

患難時代に入ってから、14 万 4 千人が神のしもべとなりました。そして 11 章で、二人の証人によって、エルサレムに住む人々が神をあがめ、イスラエル人の間にイエスを信じる人たちが現われ始めます。そして、荒野に逃げたイスラエル人たちは、メシアが戻って来られるのを見て、イエスこそメシアであることを知り、世界中のイスラエル人が、イエスがメシアであることを知ります。このように、イスラエル全体が苦難から贖い出される初穂として、14 万 4 千人が立てられたのです。また、他の異邦人たちが大患難の時に、獣の刻印を押されることを拒んで殉教する人たちの初穂ともなっているでしょう。

4B 偽りのない口 5

⁵彼らの口には偽りが見出されなかった。彼らは傷のない者たちである。

彼らは、その告白において、偽りはありませんでした。イエスを主としているのであれば、獣の像を拝むようなことはしませんでした。告白と行いが矛盾していなかったのです。そのような者たちこそが、回復したシオンにいるにふさわしい者たちです。「詩 24:3-4 だれが【主】の山に登り得るのか。だれが聖なる御前に立てるのか。4 手がきよく心の澄んだ人そのたましいをむなしいものに向けず偽りの誓いをしない人。」

ゼカリヤ書には、バビロンからエルサレムに帰還した人々の中で、儀式はきちんと守っているのに、言い争いをしていた様子が伺えます。そこで主が、叱責している場面がありますが、そこでも、回復されたエルサレムでは、真実を語ることを期待されていることが書かれています。「ゼカ 8:15-17 そのように、今や再び、わたしはエルサレムとユダの家に幸いを下そうと決意した。恐れるな。16 これがあなたがたのなすべきことだ。あなたがたはそれぞれ隣人に対して真実を語り、真実と平和をもたらす公正さをもって、あなたがたの門の中でさばきを行え。17 互いに心の中で悪を謀るな。偽りの誓いを愛するな。これらはみな、わたしが憎むものだからだ。——【主】のことば。」

そして、「傷のない者」とありますが、これは主の前で献げるいけにえが、傷のないものであなければいけないという教えから来ています。足が骨折している羊は、主は受け入れられませんでした。傷や欠陥があってはならないのです。キリスト者は、傷のない子羊の血によって、贖われたことが第一ペテロ 1 章 19 節に書かれています。そして今度は私たち自身が、主が来られる時にそのような者にしていただきますよう、とパウロは祈っています。「I テサ 3:13 そして、あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスのご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としていただきますように。アーメン。」

このように、14 万 4 千人は、キリスト者にとっても模範となるような、神のしもべの姿です。彼らは、どんなことがあっても主と共にいました。そして、彼らは主に礼拝を献げますが、それはまさに天における礼拝でありました。我々、キリスト者は御霊によって、天にあるものを今、この地上で信仰によって迎え入れ、礼拝し、賛美の歌をうたいます。そして、私たちも、これから解放される被造物の初穂、御霊の初穂だとロマ書 8 章で言われています。そして、私たちも真実を語るものとして召されていますし、そして、主が来られる時に傷のない者となっているように祈られています。